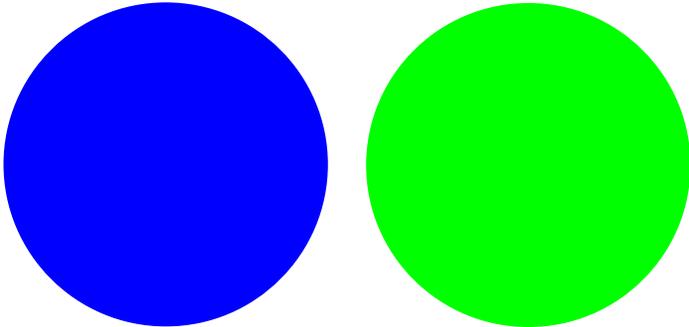




希望学宣言



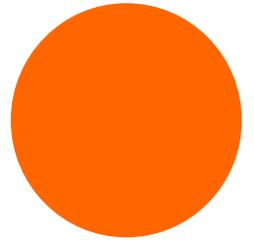
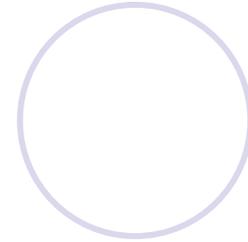
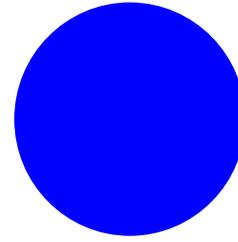
2005年7月15日

東京大学
社会科学研究所

社会において**希望**は前提だった。

しかし、その前提が揺らいでいる。

根源的問いかけ



- 希望とは何なのか？
- 社会は希望をどう変えるのか？
- 希望は社会をどう変えるのか？

「希望を社会科学する」

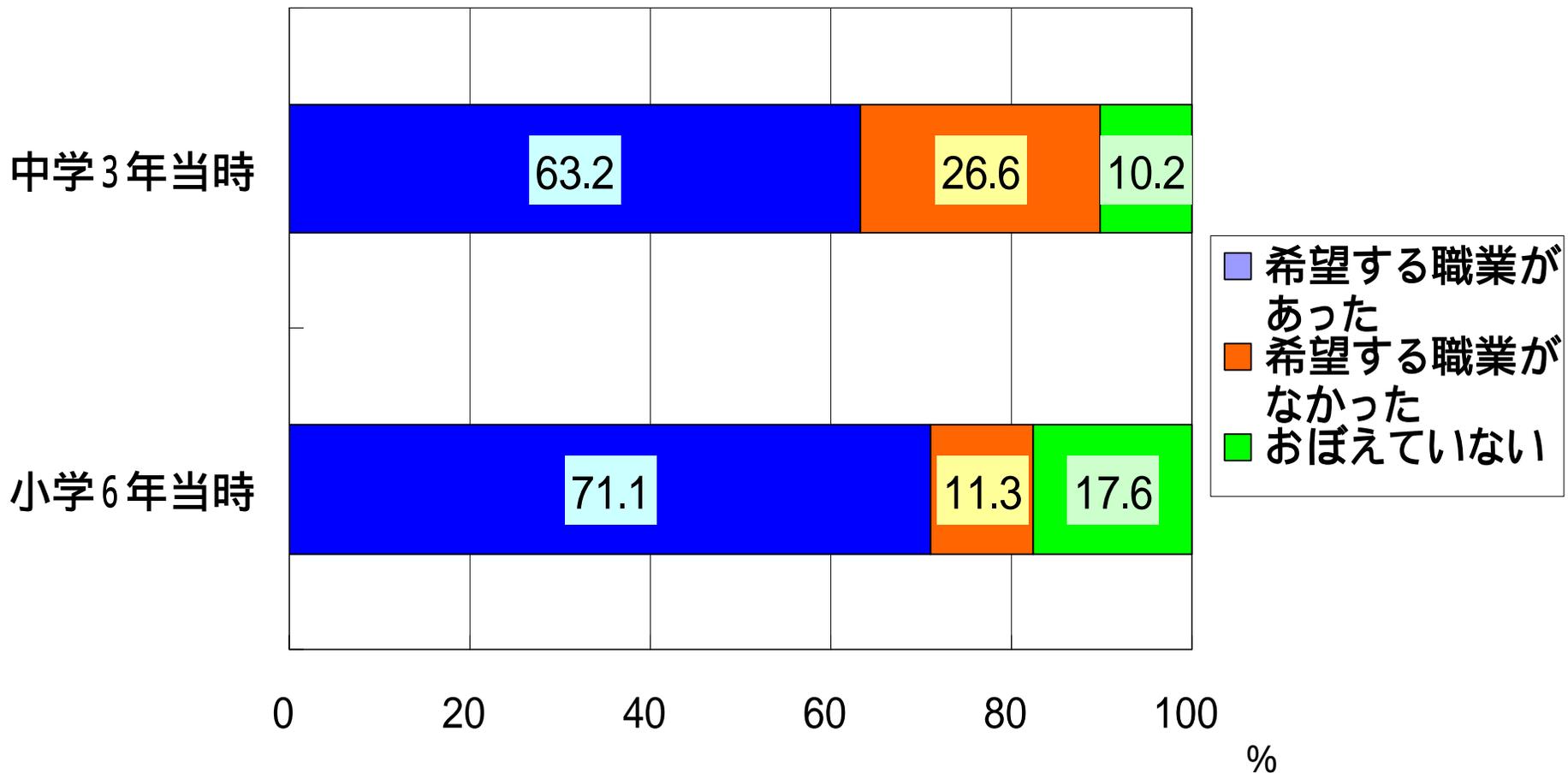
- 希望を、個人の性格、感情としてだけでなく、社会の原動力・産物として、考察
- データや記録など、社会に表現された客観的な事実を重視
- 分野を超えた「対話」による発見と展開

分析事例

- 小中学生の頃になりたかった職業(希望)と、その後の現実を、20代、30代、40代にたずねてみた
- くわしくは、次の「データが語る希望の在り処」で説明

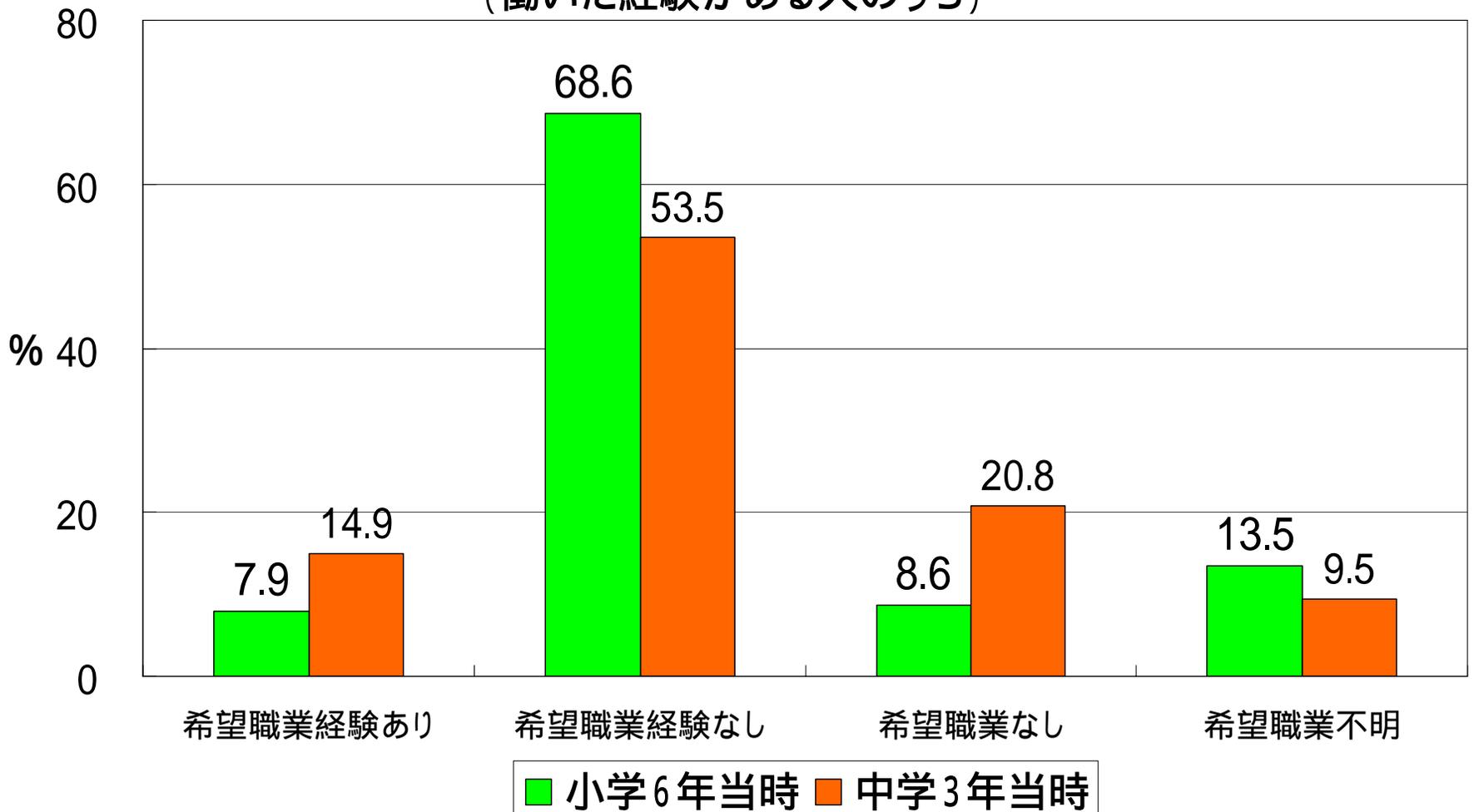
子どもの頃に希望があった

図1 20代～40代の小中学生当時における職業希望の有無



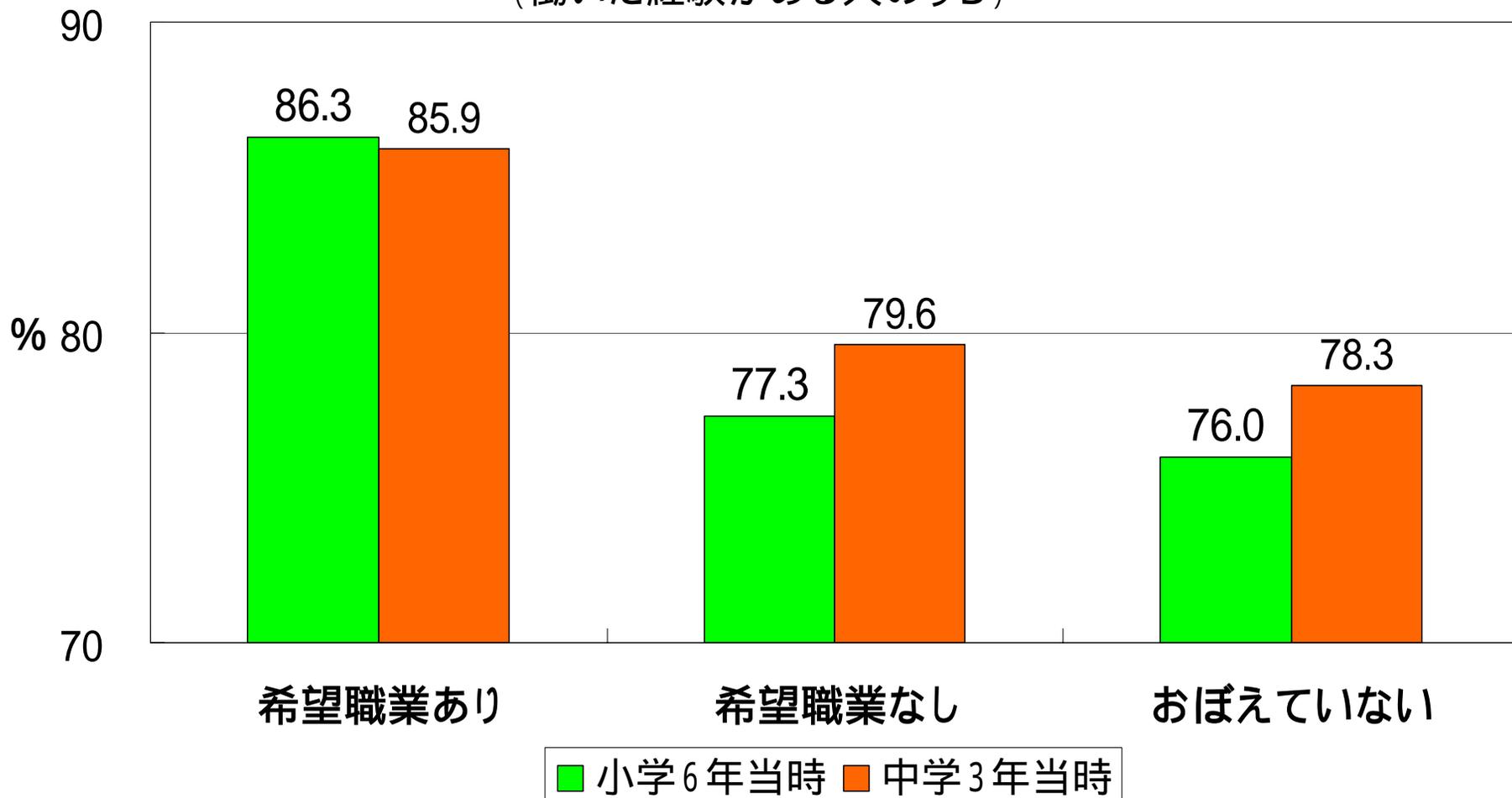
希望とは希に実現する望み

図2 小中学生時代の職業希望と、その後の実現状況
(働いた経験がある人のうち)



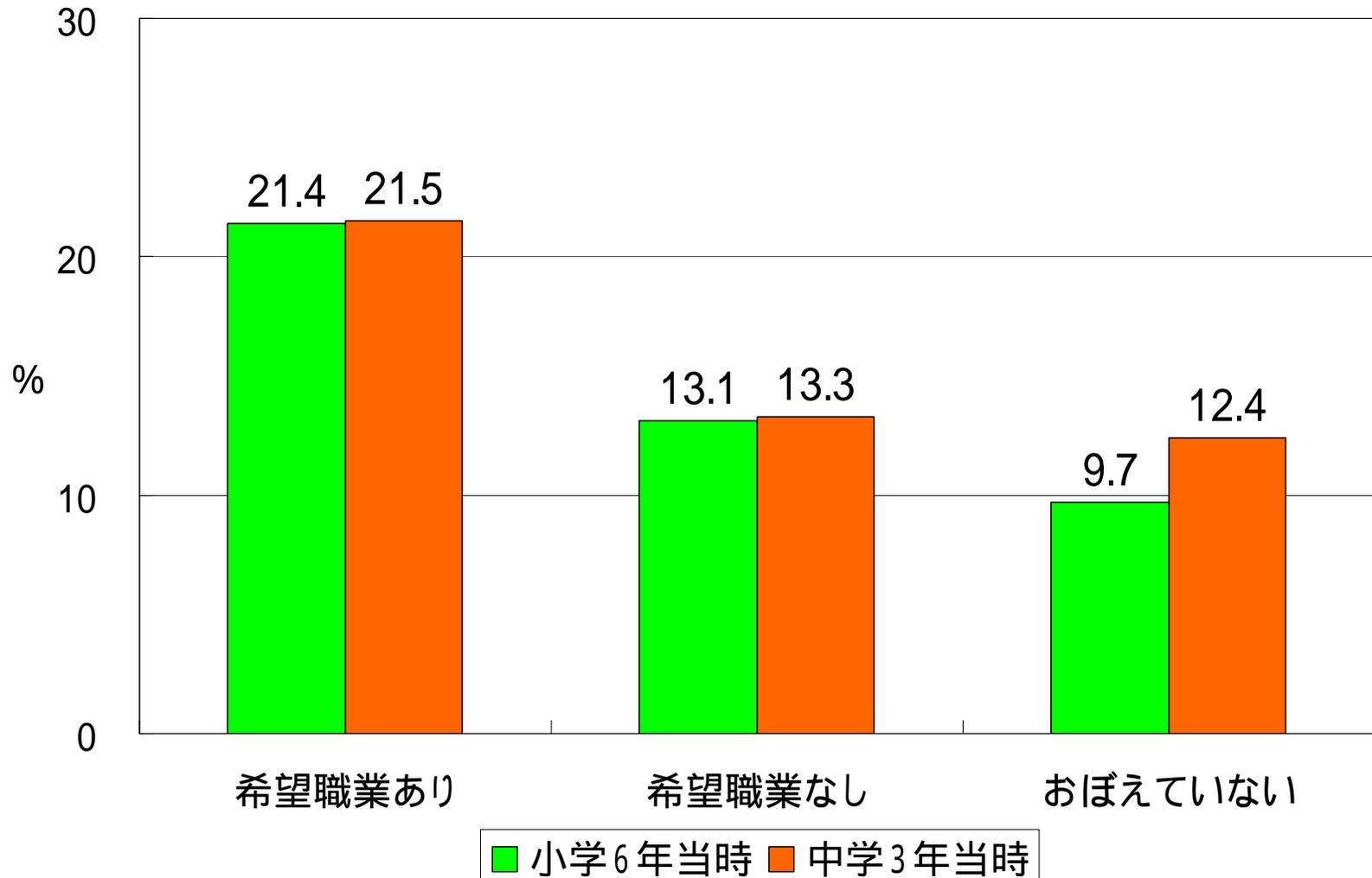
希望が生む「やりがい」との出会い

図3 やりがいのある仕事に就いたことがある割合
(働いた経験がある人のうち)



「強い」幸福に希望が必要

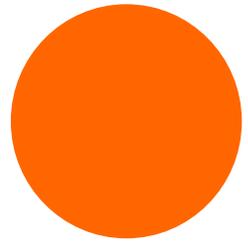
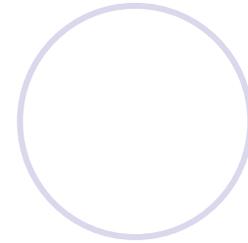
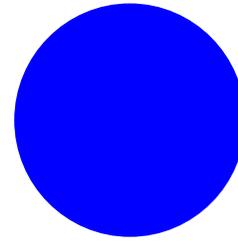
図4 自分は現在「とても幸福である」と感じている割合



希望のパラドックス (逆説)

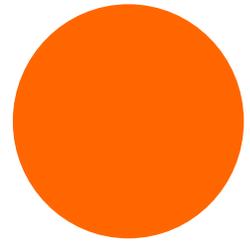
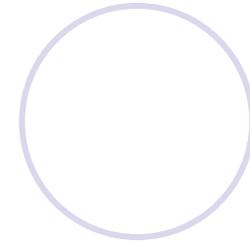
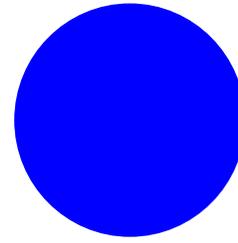
目的ではなく、プロセスとしての希望

希望学の手法



- 調査・研究・分析
- 「希望サロン」開催
- 一般向け書物の刊行
- その他

希望学の目指すもの



- 「希望」を語る共通言語の構築
- 個々が希望を考え、行動するための、事実に基づくヒントを提示
- 希望学からみた社会政策の提案